2004年5月 雑誌「自然と人間」に掲載される

神奈川県川崎市・旧国鉄新鶴見操車場跡地

市民の森づくりが行政を動かす

夢のように思われた小さな運動が、いま実を結びつつある。

神奈川県川崎市にあった旧国鉄の新鶴見操車場。1937年につくられ東洋一と言われた約30ヘクタールの敷地をもつ操車場は、全国の物流と京浜工業地帯の発展を支えてきた。84年に廃止となり、跡地利用をめぐり意見が分かれた。

当初の計画はドーム型スタジアムの建設だった。バブル崩壊後の大規模計画に8000人の反対署名が集められ、「白紙に戻して市民参加での検討の場を」との動きが起きた。その後、財政状況の悪化も重なり2000年に白紙に戻された。川崎市議員だった千葉美佐子さんは、計画(案)をミニフォーラムなどで明るみに出し、50年100年先を見据えた都市づくりに取り組んできた。操車場の「今と昔」歴史調査では工業の発展に寄与した操車場がその一方では、幸区が東西に分断され、国策による立ち退きでコミュニティや文化失われ、緑豊かだった自然環境も破壊したことを知った市民が、「失われ自然環境とコミュニティを再生しようが地域の課題であることを、た子とを知り、たに50年先を見据えた都市のあり方を考える活動を行ってきた。99年議員を引退した後も、その後、市民の要望を跡地利用に活かそうと「幸まちづくり研究会」をつくった。

市民と「市民の声を調査すると『森にしたい』という声が多くあった。東京と横浜にはさまれた一等地を森にするなどできるだろうかと思いをながらのスタートでした。その後、箱モノ重視の公共事業の見直しや神戸震災で防災上森が大きな役割を果たしたことなど、追い風が吹いてきました」とふり返った。

この区域は加瀬山を背後にひかえた田園だった。操車場や国鉄職員官舎、工場などを建てるために山が崩され住民が土地を追われた。人々が集う祭りの場であった神社も移転せられた。この区域の歴史を調べた千葉さんらは「こんどは住民の手で森に戻す番です。かつてあったようなコミュニティも復活させたいですね」と意欲を燃やす。

運動の輪は広がった。ドイツのシュツットガルトで操車場の広い跡地を森と公園にした前例のあることも知り弾みがついた。04年5月1日に幸まちづくり研究会が主催し跡地で開いた「ネイチャーフェスティバル」には予定の倍の2000人が参加、関心の高さがうかがわれた。

長年の運動が実り、跡地の4割を所有する川崎市がそこに研究施設を誘致し周辺を森とするの方針を打ち出した。「創造のもり」と市が名づけたその区域にはすでに市民や労働組合による植樹がおこなわれ、また国際生態学センターの宮脇昭氏の手によるビオトープ「さいわい夢広場」がつけられた。それらが市民の手で維持管理されているのも、この地ならでのことだ。

さらに04年3月には市の土地活用方策検討委が整備方針を発表、残り6割の民間の用地にも25%の緑地の確保がうたわれた。

大きな成果を得たが、30ヘクタールの跡地すべてを森にすることは川崎市の財政事情から難しいという。首都圏でこれほど広い森をつくれる機会はない。国や県で支援を英断する行政責任者はいないのだろうか。100年後にまで名を残すこと、間違いないのだが。

写真1

東洋一を誇った旧国鉄新鶴見操車場。1984年廃止直前。

写真2

2000年に跡地につくられたビオトープ。市民の手で管理され憩いの場となっている。

写真3

植林が進む創造のもり。奥は2000人が集まったネイチャフェスティバル。(2004年5月1日)